

有病率に性差が見られる疾患

表4 男女差でほぼ2倍以上の受療率の差のある疾患（人口10万対）

男性に多い疾患	(人)		女性に多い疾患	男性	女性
	男性	女性			
頭蓋内損傷	11	6	カンジダ症	2	15
挫減損傷および外傷性切断	30	14	鉄欠乏性貧血	3	18
尿路結石症	12	6	その他の貧血	5	15
痛風	21	1	甲状腺中毒症	5	16
十二指腸潰瘍	20	10	その他の甲状腺障害	3	17
急性心筋梗塞	13	7	高脂血症	46	114
陈旧性心筋梗塞	10	5	血管性および詳細不明の痴呆	29	70
レイノー症候群	11	1	神経障害、ストレス関連障害および身体表現性障害	29	43
飲酒による精神及び行動の異常	32	3	アルツハイマー病	6	15
食道の新生物	10	2	結膜炎	25	48
胃の悪性新生物	48	26	白内障	67	142
肝および肝内胆管の悪性新生物	14	8	メニエール病	4	14
気管・気管支および肺の悪性新生物	30	13	本態性高血圧症	395	628
B型ウイルス肝炎	11	6	くも膜出血	8	15
			胃炎および十二指腸炎	66	100
			便秘	7	14
			慢性関節リウマチ	14	55
			関節症	69	213
			頸腕症候群	14	30
			骨粗しょう症	7	92
			膀胱炎	2	20
			大腿骨の骨折	13	38

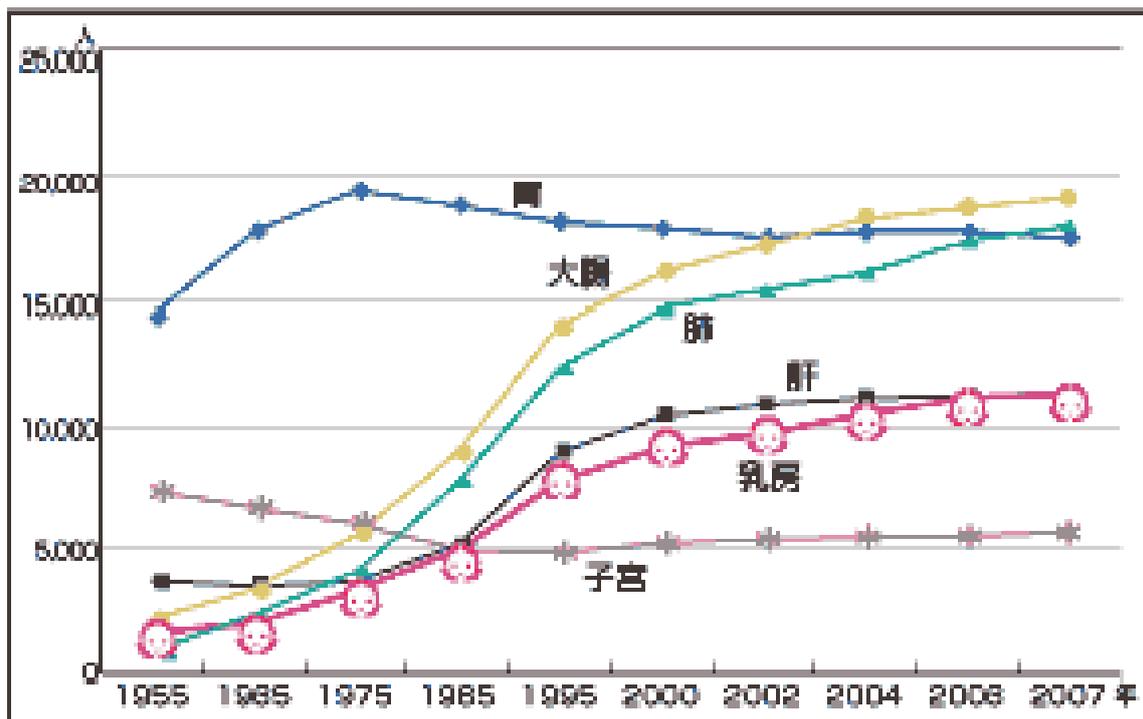
平成11年患者調査（厚生労働省）より作成

性差医学の視点から
疾患・病態を見直してみよう

性差医学のエビデンスの確立

Miyuki Katai, MD, PhD

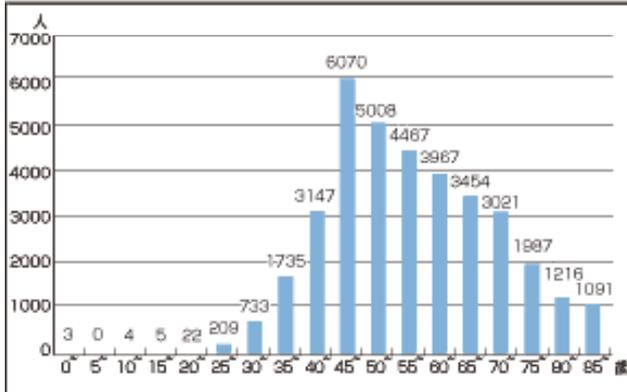
グラフ1： 女性のがん部位別死亡数





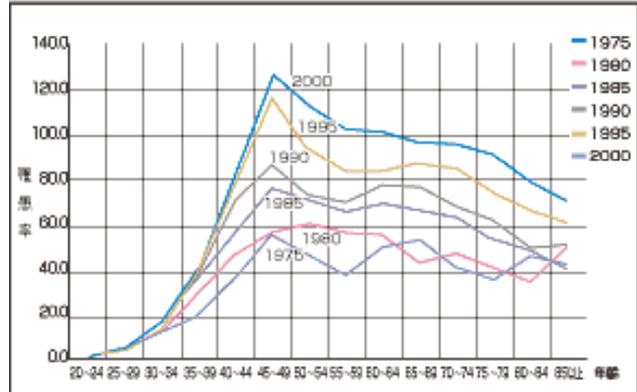
グラフ2：

40歳前後を境に、乳がんにかかる人が急激に増加します



グラフ3：

乳がんにかかる率は年々上昇しています

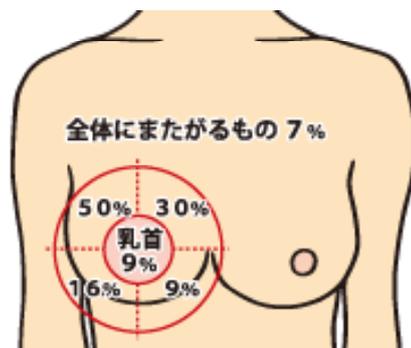
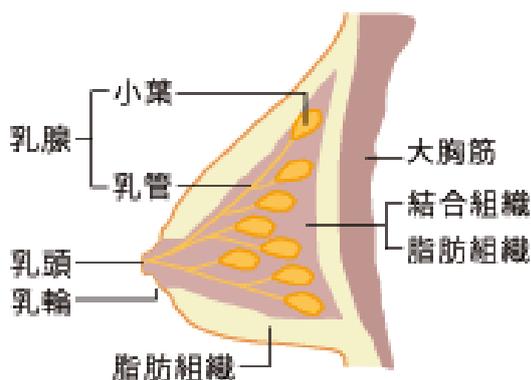


日本では、乳がんにかかる女性は年々増えており、今では年間約4万人の女性がかかると推定されています。

また亡くなる方も、ここ50年間で7倍近くに増えていきます。

2008年には1万1千人を超える方が亡くなりました。

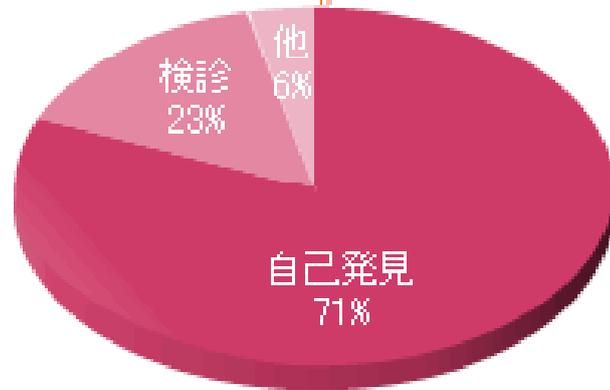
また若い年代の乳がん死亡率が年々上昇しています。20代でかかる方は少ないとはいえ、若いときから関心をもつことが大切です。





乳がん発見のきっかけ

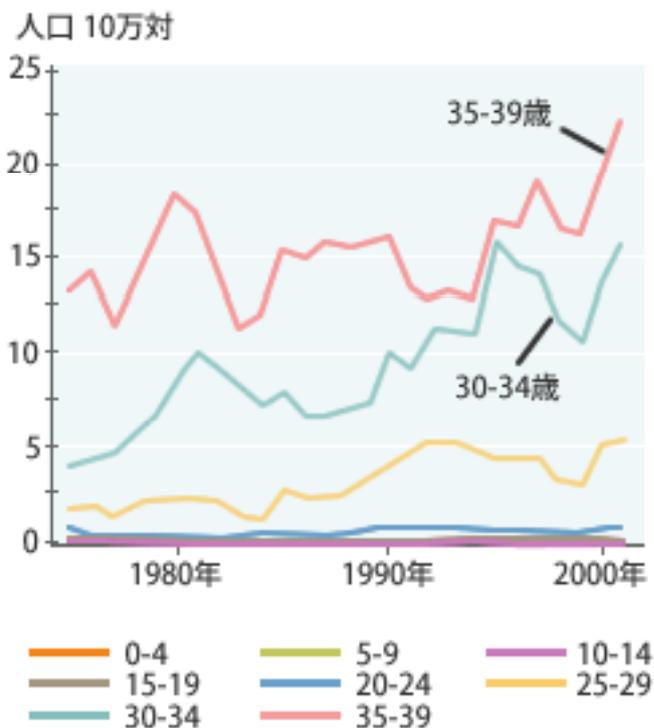
乳癌学会が行っている「全国乳がん患者登録」の最新版2005年の調査結果によると、乳がんの発見状況の71%が「自己発見」によるものでした。

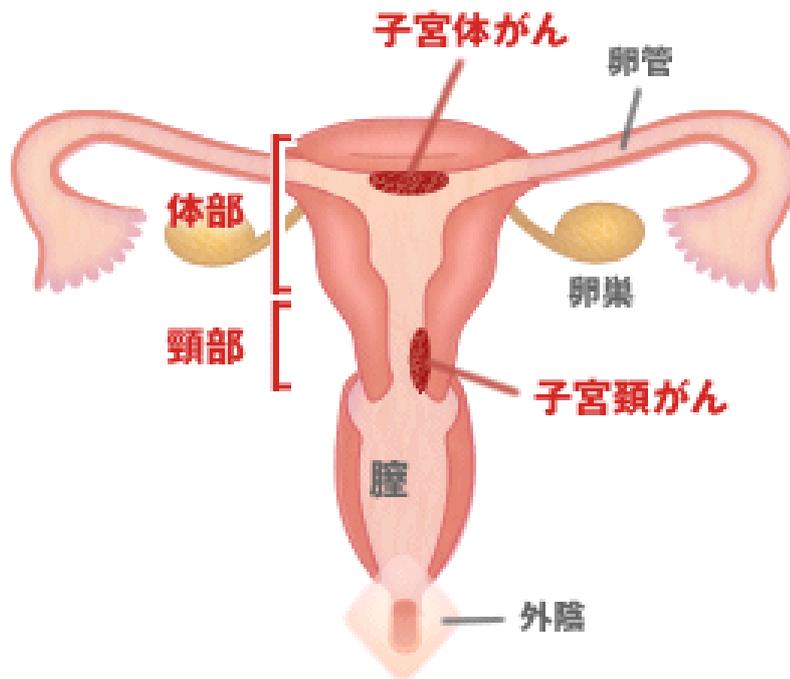


乳癌学会「全国乳がん患者登録」2005年調査

「検診による発見」は23%でしたが、今後、検診率が高まることで、より「検診による発見」が増えることが期待されます。

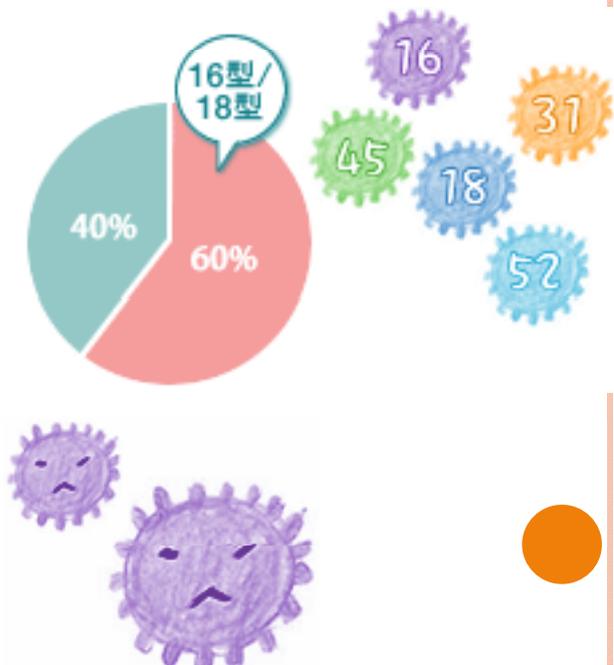
(2) 子宮頸がん年齢階級別罹患率 (女性/全年齢/1975~2001年)





子宮頸がんの原因はウイルスHPV

- 子宮頸がんの原因は、ヒト・パピローマウイルス（HPV）の感染が関連しているとされており、患者さんの90%以上からヒト・パピローマウイルスが検出されています。
- HPVは性交経験があれば誰にでも感染し得る、ごくありふれたウイルスで、女性の約8割が50歳までに感染を経験すると言われています。





PV感染を予防するワクチン

- ◆ 米国や豪州では、保険未加入の子供や12~26歳の女性が無料で予防接種を受ける制度が導入。日本でも2009年10月グラクソ・スミス社の「サーバリックス」が厚生労働省に正式承認されました。
- ◆ ワクチンはHPVの感染を防止するもので、子宮頸がんを治療するものではありません。
よって、ワクチンの接種はセクシャルデビュー（初交）前に接種すると最も効果が高いといわれています。
- ◆ セクシャルデビューを過ぎた20代・30代女性がワクチン接種を受けた場合でも、今後の感染を予防する効果はありますが、まずは検診で子宮頸部に異形成が認められないか？を定期的に確認することが大切です。
- ◆ 欧米では「もし、あなたが20歳以上なら検診を！そして娘さんにはワクチンを！」というキャッチコピーもあるほど、浸透してきています。

エストロゲン欠乏に伴い出現する 各種疾患・病態

